

‡ 地域振興 † < 6次産業化認定者の取組事例 > 26

## 道南駒ヶ岳の麓で高糖度かぼちゃの生産に取り組む

### 有機 J A S 認証取得の先駆者 茅部郡森町 株式会社みよい

農林水産省 北海道農政事務所

函館地域拠点地方参事官室

もととき ただひろ  
元木 正宏



#### 1. はじめに

雄大な駒ヶ岳の麓にある道南の茅部郡森町で有機農業に取り組み、かぼちゃの生産と加工品を製造し、販売する株式会社みよいを紹介します。

株式会社みよいは、明井清治（みよいせいじ）氏が代表を務める農業生産法人です。先代から昭和 52 年に事業を継承すると同時に、他との差別化を図るため有機農業に取り組みました。

#### 2. 有機農業の取り組み

株式会社みよいで生産するのは、かぼちゃのみです。しかも品種は「くりりん」で統一し、全て有機栽培という徹底ぶりです。有機農業に関しては、有機 J A S 認証制度が発足（平成 12 年）した直後に同認証を取得し、トップランナー的な存在になっており、全国各地の生産者が有機農業を学ぶため研修に訪れることも少なくありません。また、有機農業に取り組む生産者が、相互に技術力や経営力の向上を図ることを目的に設置された「道南有機農業ネットワーク」に参加し、ベテランとなった今でも、有機農業に取り組む仲間と情報交換や研さんを積んでいます。

株式会社みよいが使用する堆肥は、ホタテの貝殻等を原料とした有機ミネラル資材を混ぜており、ミネラル分が豊富とのこと。また、海洋深層水の塩分を抜いたミネラル水と木酢液を葉面から活力アップの目的で散布しています。このような取り組みにより生産

されたかぼちゃは、一般的なかぼちゃより糖度が 5 ポイント程度高く、20 度を超えています。毎年、第三者機関に成分分析を依頼し、糖度のみならず栄養価の高さ等について客観的なデータを揃えています。

加えて、令和 3 年度には、グローバル G A P（食品安全、環境保全、労働安全に資する農業生産工程管理の国際基準の一つ）を取得し、将来は直接輸出も視野に入れています。



写真 1 糖度 25% 超の自主仕分け品「黄金のかぼちゃ」

#### 3. 6次産業化の現状

株式会社みよいでは、生産したかぼちゃの多くは生鮮で販売しますが、約 2 割強を自社加工に仕向け、加工品を製造しています。

平成 23 年から、かぼちゃのペーストを製造し販売を行っていましたが、農林水産省の事業である 6 次産業化サポート事業を活用しサポートセンターからプランナーの派遣を受けるなど、六次産業化・地産地消法に基づく

総合化事業計画の認定に向けて取り組んできました。その結果、平成 27 年 2 月に認定を受け、新商品の開発を進めました。(令和 2 年 3 月に認定を更新)

これにより、令和 4 年度は、コロナ禍でありながらも、総合化事業計画で認定された加工品の売上げは伸びています。対前年比で、「かぼちゃのマッシュ」は 54%の増、「かぼちゃのスライス」も 92%の増。「かぼちゃの皮ペースト」だけは 64%の減でしたが、加工品のトータルでは 44%の増という結果になりました。加工品は、ホテルや飲食店に卸す業務用だけではなく、市販もされており、これらの商品も全て有機 J A S 認証を取得しています。中でもかぼちゃのペーストは、レトルトパウチ仕様のため常温保存が可能で、スープやプリン等のスイーツ原料として、手軽に利用できます。

これらの、生鮮かぼちゃや加工品は、糖度の高さや有機 J A S 認証の付加価値もあり、小売店やインターネットサイトでは慣行栽培のかぼちゃや加工品よりも 3 割～5 割程高い価格で取引されています。

また、総合化事業計画で認定された加工品ではありませんが、中小企業庁の事業再構築補助金を活用して、今年からジェラートの製造ラインも導入しており、自宅敷地内にある



写真2 自宅敷地内にある直売所  
(隣接するのは加工場)

直売所でソフトクリームの提供を開始し、その味は好評だったようです。

#### 4. 今年のかぼちゃの生産や品質の状況

令和 5 年の作付面積は、借地も含め 50.2ha。収穫量は、少雨の影響から小玉傾向だったため、前年比 25%減の 480 t 程度に留まりました。また、高温の影響で日焼けが発生し、品質も低下しました。日焼けをすると日持ちが悪くなることから、例年よりも早めに加工作業を開始することを検討しましたが、人手が足りず、開始時期を早めることができませんでした。その結果、加工向け原料の腐敗による相当数のロスが出てしまい、加工品の製造量も減る見込みです。



写真3 かぼちゃスライス (冷凍品)



写真4 かぼちゃペースト (レトルト)

## 5. 最後に

有機農家として、そして有機加工品製造業者として、今後より一層の活躍が期待される明井代表に将来の抱負を語っていただきましたので、御紹介します。

「今年は猛暑の影響で、加工に仕向けることができないものが相当発生したのが残念です。早めに加工を開始できていれば廃棄を少なくできたと思っています。これから、人口減少や高齢化が増々進むことから、加工品のニーズは高まっていくと思うので、青果販売から加工品製造販売に力点を移していき、需要に見合った生産量にしつつ、加工原料を無駄なく活用することを検討しています。また、需要があれば経営の多角化の観点から、有機大豆を作ってみたいです。」



写真5 収穫したかぼちゃを持つ明井清治代表